

Title	国語問答 ホアン・デ・バルデス(翻訳)
Author(s)	Valdes, Juan de; 中岡, 省治
Citation	大阪外国語大学学報. 30 p.97-p.121
Issue Date	1974-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80509
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

国語問答

ホアン・デ・バルデス（翻訳）

中岡省治

Diálogo de la Lengua⁽¹⁾

（国語問答）

Marcio, Valdés, Coriolano, Pacheco

Juan de Valdés es una de las figuras principales en la historia de la lengua española, comparable con la de Antonio de Nebrija de quien la España Renacentista pudo enorgullecerse ante el resto de Europa que comenzó a tener una apremiante conciencia de la exaltación de las respectivas lenguas nacionales.

El “Diálogo de la Lengua”, la única de carácter lingüístico de las obras que publicó Valdés y dejada en el olvido hasta el siglo XVIII, es un fruto de la corriente renacentista que procuraba valorizar y dignificar las lenguas “vulgares”. Si Nebrija fue el primer humanista que intentó sistematizar la gramática del romance castellano, ya convertido en la lengua de España, justamente según el patrón de la lengua latina, Valdés² tuvo derecho a ser considerado el egregio maestro que aspiró a observar la lengua española de su época tal como se presentaba, con su criterio bien fundamentado de un “hombre nacido y criado en el reino de Toledo”.

A continuación aparece una modesta traducción del “Diálogo de la Lengua”, que, pese a su indiscutible valor e importancia para el estudio de la historia de la lengua española, quedaba sin ser traducido al japonés, lo que me ha movido a imponerme con gran timidez esta difícilísima tarea.

（註1）

この翻訳にあたっては、Juan de Valdés, Diálogo de la Lengua, edición y notas de José F. Montesinos, Clásicos Castellanos, No. 86 をテキストに用いた。Valdés 以外の三人の人物についてもその実在が確認されている（pág. 18, Diálogo de la Lengua, Clásicos Ebro, No. 18）。なお、訳文では四人の対話者を夫々、その頭文字で表わした。

この Diálogo de la Lengua については、永田寛定先生の貴重な研究論文 “Al margen del Diálogo de la Lengua”（昭和34年）があり、永田先生が、これを「国語問答」とお訳しになっているので、これをそのまま借用させていただいた。

M. 一さて、若い人たちは食事に出かけ、私たちだけになったので、邪魔者が来ない内に、今朝私があなたに言いかけた話の続きをしては如何でしょうか。

V. 一あなたが何を言おうとするのか思い当たらないが。

M. 一思い当たらないって おっしゃるのですか。私たちが今朝お喋りをしていた時にその話から、ずっとまえにひとつ真面目な好奇心を抱いたことがあったのをふと思い出して、そのわけをあなたにお話したのを覚えておられませんか。私の方は、そのことについてあなたと話し合ってみたくて、何日も前から思っていたのですよ。

V. 一そう、思い出した。すっかり忘れていてましたね。

M. 一ところで、私たちは、あなたのご意向に従い、またあなたにお仕えする意味からも、今朝はあなたのお気に入ることごとについて話を交わし、お尋ねのあったことにもすべて、あますことなくお答えいたしました。皆の言うように、誰に対してもいんぎん丁重なあなたのこと、私たちにもそうあっていただきたいものです。ついては、私たちのこの上もない興味を引くことを今日の午後は話題としていただいて、あなたのこれまでのご提案に私たちが応じたように、これからあなたにしようとする私たちの質問に答え、私たちを満足させていただきたいのです。

V. 一そんな回りくどい言葉をろうして あなた方の要求を持ち出してくるのではなかったら、何の躊躇もなく、あなた方の意に従うのだが……しかし、そちらの要求の中にそんなに沢山の理屈を並べ立てて向ってくるのを見ると、私を何か面倒なことに引き込んでやろうとしているような下心があるようですね。まず、私から何をきき出したいというのか、包みかくさず言ってくれないことには、どう返事をしたらいいのかも分かりませんよ。

M. 一私たちがあなたにお願いしたいことは、まず、それ以上の詮索はなさらずに、これからあなたに申し出ることにかく従っていただくと約束されることなのです。

V. 一思慮分別に富むあなた方のこと、理屈に合わぬことや不謹慎なことを私に求めはしないでだろうと信じて、あなた方の意向に従うと約束しましょう。

M. 一それでは困ります。私としては、何んであれ、とにかく静かに話をきくと、私たち三人にご確約いただきたいのです。

V. 一何のためにあなた方はそんなに堅苦しいことを私に要求するのですか。多分、あなた

方三人がしめし合わせて私をぎゅっと言わせてやろう^(註) とでも考えたのですか。でも、まあよろしい、何事であれとにかく、今日の午後は、あなた方が私に尋ねたいということには全部、私の知っている限りの答えをすると約束しましょう。これでよろしいかな。

M. 一私としては、満足この上ありません。

C. 一私もまったく結構です。

P. 一私としては、最初のお約束で十分だと思っております。

V. 一さて、そういうことにして、さあお尋ねを始めて下さいよ。あなた方がこの私から聞き出そうとしていることが、どんな訶摩不思議なことを知るまでは私は落着けませんかね。

M. 一摩訶不思議なことですって。正にそうなんです、それが何かをお分かりになったらびっくりされるような話しですよ。

V. 一まあ、それが何んであってもいいでしょう、そこで止めておきなさいよ。どうかお願いだから、例の話とかいうのをはっきり聞かせてほしいものですね。

M. 一はい、分かりました。あなたもよく覚えておられるでしょうが、あなたが今から二年前この地を出てローマに行かれた時に、私たち三人にたえず手紙を書いて友情のきずなを保ち、また友誼を固くしたいと私どもに約され、事実、そうして下さいました。さて、あなたがそこに赴かれたあと、私どものうち誰があなたのお手紙を受取ろうとも、そのお手紙を他の二人にも回わそうと申し合わせたことをご承知下さい。私どもはお手紙をいただく間違いなくそれを見せ合っては、大いに心を慰め、時のたつのも忘れ、喜び合ったのです。そしてまた、あなたのお手紙を拝見し、この胸の中に、この地を離れた友の思い出を新たにするだけでなく、お手紙を一段と印象付けたあの洒落た文言や、機知あふれる筆遣いを見ては、私どもは笑いもし、おかしがっ

(註2)この部分、原典では“¿Avéis por ventura concertado todos tres para el mohíno?”となっている。バルデスはこの書の149ページで、mohíno は *desagraciado o desdichado en el juego* :「勝負でつきのない・負けのこんだ(人)」を意味すると説明している。また、この mohíno を用いて、Tres al (o contra el) mohíno という成句もあって、これは、特定の人たちが謀りごとをめぐらせて、他の人々に対抗したり、大勢の人々が結託して弱い立場の者をやっつけることを意味する。さしずめ「三人が謀って一人の弱い者をかにもする」とでもいえる。この表現をもじって、バルデスは自分を mohíno に見立てて、そのような状況にあるが我身を嘆いたのだった。

たものでした。まだその上に、あなたの書かれたカスティリア語⁽³⁾の手紙の中に、必らずとい
っていいほど顔を出す、例の洒落た、巧みで、あでやかな表現をこと細に読み返して、これで
話題をも、また議論の種をも得ることとなりました。というのも、パチェコさんはイスパニア
に生れ育った者として、他の誰にも劣らずカスティリア語を知っていると自負しているし、私も
それに興味を持つ者として、今喋れる程にまっとうにカスティリア語を書けるようになりたいと
願っておりますし、またコリオラノさんは立派な大宮人として、カスティリア語を完全に会得し
たいと常々望んでいるものですから（こういいますのも、ご承知のように、現在騎士の間だけで
なく貴婦人たちの間でも、カスティリア語が喋れるということは上品で、秀でた特性と考えられ
ているからなのです）、語彙、文体の点だけでなしに、正書法の面でもあなたのお手紙の中
には、いつも私どもの注意を引く材料が数々あったのです。加えて、あなたと同じように言葉遣
いの正しい、またカスティリア語にも高い見識を持っている人々でさえ使うのを見たことのない
ような、そんなたぐいの言葉使いに出くわすと、あれやこれやと激しく議論をたたかわすことが
しょっちゅうありましたが、これも、私たちの内めいめいが、先生になりたかったためか、それ
とも教えられる側に立ちたくなかったかのどちらかだったからなのです。さて今あなたがここ
おいでになるのですから、あなたの旨とされている書き方の中で、前に申したように私どもの気
の付いた点に説明をいただけるというものです。こういうわけで、カスティリア語を母国語と
するパチェコ氏、未だ初心者のコリオラノ氏、それに大いに興味を持っているこの私の三人が
あなたにお尋ねすることにお答えをいただき、私たちを納得させて下さるようお願いしたいので
す。

V. 一もしあなたがこのことを食事の前に私に聞かせてくれていたのなら、果してあなたが
真面目にそう言っているのか、そうでないのかを疑ってもみたことでしょうか、もう食事もすん
だことだし、またあなたが冗談、軽口をたたくのが得意だということを見せびらかして、それで
あなた方のこの招宴の興趣を高めようとしているとも考えられるので、あなたの言っていること
は何ひとつ信用しないことに決めましたよ。いいですか、もしあなたが私から何かでも聞き出し
たいと思っているのなら、今すぐにそんなお追従めいた軽口は止めなければいけませんね。とい

（註3）このテキストで始めて、(el) escribir castellano という表現が表われる。この“castellano”とい
う表現が lengua romance de España として、ギリシア語、アラビア語などの中世の学術語に比肩する
力を持つとの意識下で用いられたのは Alfonso el Sabio に遡りうると考えられる（pág. 13 y sigs.;
Amado Alonso: Castellano, Español, Idioma Nacional）。しかし、15世紀、16世紀の国家意識の高揚と
共に、castellano に代わる español が、その意識をより明確に具現した名称として広く用いられるようにな
ったといわれる。Valdés は、しかし、この著書では僅かの回数しか“español”を用いず、“イスパニア語”
を意味する場合にも“castellano”の名称を好んで使っている。文化の中心であった Toledo に生れ、育っ
た者としての自負が、この名称に限りなき愛着を覚えさせたのだろうか。

うのも、たとえ私がその気になっても、譬えにあるように、馬方仲間での融通程度⁽⁴⁾のことしか私から引き出せないぐらいは、あなた方も十分お分かりでしょうに。

C. 一あなたのお言葉は私たちをまったく愚弄するものとしか言いようがありませんね。龍弁をろうし私たちを煙にまいて、先程の約束を反古にしてしまうお積りなんですね。でも、それなら見当ちがいですよ。いいですか、例のお話ししました件についての私たちの質問全部にあますことなく、又誠実にお答え下さらない限り、あなたがなされた約束を帳消しにする気はまったくありませんからね。さっきの話しの中では、あなたのお留守中に本当にあったこと、又あなたに確かめてみたいと思っていることを真面目に申し上げたのですよ。

V. 一本当のことを言わせてもらえれば、そうは言われても、やはりあなた方に弄ばれているとしか思いようがないのですよ。

P. 一この二人の言葉が信じるに足らないと思いこんでおられるようですが、そこはどうかこの私に免じて、二人の言っていることが嘘偽のないことだとお考え下さいませんか。

V. 一まったくのまやかしであってくれた方が有難いといった気持ですね。あなた方の望んでいることはまったくとてつもないことなので、あなたを信用したくとも信じられないのですよ。

M. 一あなたの母国語についてお話しになるのが、あなたにとってそんなに変わったことに思えるなんて、私は不思議で仕方がありません。いいですか、もし私どもがあなたにその内容をお尋ねしたいと思っている手紙がラテン語で書いてあったら、その手紙についてあなたに説明を求めることを変だとお考えになりますでしょうか。

V. 一いやいや、そうは思わないでしょうね。

M. 一何故ですか。

V. 一その理由は、つまり私はラテン語を文法や他の書物を通じて習得したのですが、カス

(註4)この部分原典では、“si yo tomo la mano, ganaréis conmigo lo que suele ganar un cossario con otro”となる。これは De cosario a cosario no se pierde sino los barriles:「馬喰仲間では物がなくなってもせいぜい水たる程度」(=Entre sastres no se pagan hechuras:「仕立屋どうしでは、仕立て代は払わないもの」)という諺をもじった表現で、「同業者間では、仲間同志ではお互いに助け合い、隔通しあうものだ」という内容を持つ。ここでは、バルデスは他の三人がお追従をいっても、どうせ彼から引き出せるものは知れているし、彼も同じように、冗談めいた話しをして煙にまいてやれるぞと暗示したと考えられる。

ティリア語はこの言語を使いながら、自然に身につけたということなのです。だから、ラテン語は私の勉強した文法や書物にのっとって説明を下せるのですが、カスティリア語については、これは不可能で、日々の話の慣用によった説明しかつけられないのです。だから、まったく説明出来ない事柄について、あなた方が私に説明せよというのが的はずれだと判断するのも私としては当然なのですよ。

M. 一もし、だれか他の人があなたと異った風書いている場合に、そのことの説明をあなたに求めたとしたら、それは拒まれてしかるべきでしょう。しかし、他の人たちとは異った形式であなたが書いておられるものについての説明をお願いしているのですから、どんな理由をつけても逃れられませんか。

V. 一よしんばあなたの言う通りであるにせよ、やはり勘弁してほしいですね。通俗語の細かな言い方や僅かばかりの面白さといったような低俗で、つまらぬことについて話をして、それであな方はこの時間をつぶそうというのなら、とても利口なことだとは思えませんね。そんなことは、私に言わせれば、あなた方の聡明さや優れた判断力とはまったく無縁のものだし、あなた方に敬意を払えばこそ、私にはたとえ興味津々、心安まる話題であっても、私はそれについての話しはしたくありませんね。

M. 一あなたからそんな言葉を聞くとは残念至極です。では、あのベンボ師⁽⁵⁾がトスカナ語について書き表わした例の書物は、時間の浪費だったとでもお考えになるのですか。

V. 一ベンボ師がああ著書で時間を無駄にしたのか、それともそれだけ時間をかける値打のある仕事であったのかを判断出来るほど、私はトスカナ語に詳しくはないが、あの書物は無益な代物だったと多くの人々が言っているのを聞いたことがあるとことだけは言っておきましょう。

M. 一しかし、あなたに申し上げておきますが、そういう難癖をつける御本人さえもが、その無益な代物と称する本を数限りなく利用しているのが現実ですし、加えて、ベンボ師の言う主張を認め、これをよしとする人々もいるのですから、あなたとは意見を異にする人々も多いと言わざるを得ません。このベンボ師は、その主張を開陳し、われわれ人間はみな生れながらに授かり、母親の乳房をくわえつつ覚えた言語を、借りもので本で覚えた言語よりもなお一層高め、それを充実させる義務を負っていることを立派に証拠立てているのです。これについて、ベンボ師

(註5) Bembo 師: Pietro Bembo(1470—1547) はヴェネツィアの枢機卿であり、法王レオン十世の秘書官をも務めた高僧である。同時に、秀れた古典学者でもあり、当時のイタリア人が文学語として何をとるべきかという問題を追求し、1525年「俗語の散文」Prose della Volgar Lingua を書いた。ここでは、この「俗語の散文」のことを話題としている。

の言っていることを読まれたことはありませんか。

V. 一勿論読みましたとも。しかし、その考えがどの国のことばにもみな同じように当てはまるとは思いませんね。

M. 一そうでしょうか。あなたはカスティリア語がトスカナ語と同じように優雅で、優れた言語だとは考えられないのですか。

V. 一いいえ、勿論そう考えておりますよ。でもトスカナ語よりも低俗なことばだとも思うのです。その理由は、トスカナ語はボッカチオやペトラルカのような人々の手で顕揚され、かつまた充実されさえもしたのですが、こういう人たちは秀いでた文学者として立派な作品を著すことに誇りを持っただけではなく、いとも自然でかつまた優雅な文体でそれを書くことにも鋭意努力したのがわかります。あなた方もご存知のように、他の人たちとは異った風書いているものを説明する場合であれ、あるいは今日カスティリア語の中に見られる誤用を正す場合であれ、規範としてその權威を用うるに耐えるだけの配慮と慎重さを傾けて、カスティリア語でものを書いたような人はこれまで見当らなかったというだけのことなのです。

M. 一それをご承知なら、あなたの怠慢さから、こんなにも上品で、完全で、高尚で、かつまた内容豊富なことばをこれまで害われるがままにして見過されてきたこと、今もなおそのままに放置されていることを、あなたはなおさら恥すべきではありませんか。

V. 一ごもっともな意見ですが、それは私の関知するところではありませんな。

M. 一関係のないことですから、あなたはイスパニア人ではないのですか。

V. 一勿論イスパニア人ですとも。

M. 一では、何故このことはあなたと関係がないと言われるのですか。

V. 一それは、ひょっとしたら、他にイスパニア人で、あなた方の望んでいることをくわしくやってのけられるような人がいるかも知れませんが、私はそんな方々ほどに知識もないし、学問上のことごとに通曉しているわけでもありませんからね。

M. 一ですが、えらい人たちはそれをやろうとはしないし、あなたは立派なことをやってのけられる才幹を備えておられるのですから、その仕事をするのを拒まれるべきではないでしょう。

他の人にその仕事をやってみようという興味を喚起させることだけでも、立派なお仕事をされたことになるのですから。加うるに、今ここで書いて下さいとお願いしているのではなく、お話しをしていただくようにと申しているだけです。この願いをお聞き下さるべきですよ。ご承知のように、ことばと羽根とは風が吹き飛ばしてしまう⁽⁶⁾と言うではありませんか。

P. 一あの約束をなされたのですから、いとも簡単にお出来になることに そんなに勿体を付けられなくてもいいじゃないですか。すでに約束もなされたことですし、またあなたの抛りどころとなるべき作家が見当らないと言われる理由づけも根拠薄弱で、お断りになる正当な理由とはなりませんので、そんな風におっしゃることはありませんよ。特に、正書法とか称されている問題や語彙についてはアントニオ・デ・リブリシヤ⁽⁷⁾の単語集という規範を、文体については小説アマディス・デ・ガウラ⁽⁸⁾を手本として用いることも出来るのをご存知でしょうに…

V. 一そうです。抛りどころとするという点では、あなたの言うように、その二点の威信は確かに大したもの。しかしあなたはそう言うからには、リブリシヤの語彙集を十二分に見た上でのことでしょうか。

P. 一何んですって、リブリシヤはお気に召しませんか。

V. 一何が理由でこの私がリブリシヤを喜んで読まねばならないのですか。なる程、彼はラテン語に造詣も深かったし、このことは何人も否定出来ないのですが、とはいっても、アンダル

(註6)この部分原典では“…palabras y plumas el viento las lleva.”となっている。

(註7)アントニオ・デ・リブリシヤ：Antonio de Librixa (1444—1522)；本名を Antonio Martínez de Cala といい、当時はその故郷、Lebrija (Sevilla 県)を号に用い、Antonio de Lebrija と称していた。19才でイタリアに渡り、ボローニアで古典語を修めたのち、イスパニアに帰り、Salamanca, Alcalá de Henares の両大学で文法と修辞学とを講じた。ここでいう語彙集とは、Vocabulario latino-español (1492年刊)か、Vocabulario español-latino (1495年刊)のいずれかで、特に後者は Real Academia Española が設立され、その最初の事業として Diccionario de Autoridades を刊行するまでは、イスパニア語辞書編纂の上での一大典拠となっていた。なおその上に、イタリア古典学者の方法論により、ラテン語教育法を改革せんとして著した Introductiones latinae (1481年刊)で、彼は《Yo fui el primero que abrí tienda de la lengua latina en España, y todo lo que en ella se sabe de latín se ha de referir a mí.》と述べ、その自信の程を披瀝したが、バルデスはこの権威に挑戦したのであった。

(註8)アマディス・デ・ガウラ (Amadís de Gaula)：Garcí Rodríguez, 別名 Garcí Ordóñez de Montalvo により、1508年初版として発表された騎士道物語であるが、この小説の存在はすでに14世紀に確認されていたとも言われている。その初版発行以来、その後数多く発表された騎士道物語の亀鑑となったもので、セルバンテスもドン・キホーテ、前篇、第六章で、焚書の刑にあわんとする「アマディス・デ・ガウラ全四巻」を、床屋の口をかりて、「これまで書かれたこの種のあらゆる本の中で、これがいちばんすぐれたものだ、こうもわしは聞いているんですからな。そこで、出来栄えでは唯一のものとして、容赦しなくてははいけませんまい」と弁護している。

シアの人間でカスティリアの人ではなかったのもまぎれもないことです。彼はあの語彙集を実に不用意に書いたがため、冗談半分で書いたのではないかと思われるふしもあることなど、あなたが付かないのですか。ただ、リブリシアの名声を嫉んだ人たちが彼の名を失墜させようとして、その本を改ざんし、駄目にしてしまったのだなんて、あなたが言い立てないとしての話しですがね。

P. —おっしゃることがよく分りませんが。一体、どのような個所にそれが出ているのですか。

V. —正書法の面では何度となく誤りを犯していますが、その正書法は別にするとしたら、ラテン語の語彙とカスティリア語の語彙とを関連付ける説明の点でもしばしば間違っているのです。私はそうは思っていないが、彼がラテン語の本当の意味が分っていなかったのか、あるいは、どうもこちらじゃないかと思うのですが、カスティリア語の本当の意味を把握していなかったのかのいずれかと結論せざるを得ないのです。これも彼がアンドンシア生れで、そこではカスティリア語が純粹そのものではないからこうなったのですよ。

P. —あなたのおっしゃることは何だか信じられないような気持です。というのも、学識のある人たちが、正反対のことを言うのをこれまで聞いたことがあるのでしてね。

V. —たとえ信じられなくとも、その語彙集を見てみればいいのですよ。カスティリア語の *aldeano* に相当するラテン語に *vicinus* を、*brio en costumbres* に対しては *morositas* を、*cecear* と *ceceoso* には夫々 *balbutire* と *balbus* を、*loçano* には *lascivus* を、*maherir* には *deligere* を、*moço para mandados* には *amanuensis* を、*mote* あるいは *motete* に対しては *epigramma* を、*padrino de boda* には *paranymphus* を、*ración de palacio* には *sportula* を、*sabidor de lo suyo solamente* には *idiota* を、*villano* には *castellanus* を、*rejalgar* には *aconitum* を夫々当てているのがわかるでしょう^(註9)。これ以上数え上げるのは止めておきますが、私はあなた方から殆んどラテン語を解さないということを知っているし、加えてもしあなた方にこれらの単語の意味が分かれば、あなたの言うその学識の深いという人たちもそれ程の知識を持っていないか、それとも私ほどの注意を払ってその語彙集を調べなかったにちがいないというこ

(註9) イスパニア語史に於いては、16世紀はトレドがいまだイスパニア語の規範としてこの地位を確保していたので、Pacheco が “*hombre criado en el reino de Toledo y en la corte de España*” といったように、Valdés もこのことを大いに意識していた。この Toledo のイスパニア語の規範に厳しく準拠せんとする Valdés に対し、その語彙集編纂に当たった Nebrija の態度は、アンドンシア方言をも取入れ、古語形式をも採用するという折衷的な傾向が強かったと言われている。この両者の態度の差に加え、Nebrija の時代はいまだイスパニア語が中世的な様相をぬぐい切れず、又俗語と教養語との間の差も定かでなく、形態、統辞法の面でも撰択可能な形式が二重、三重に存在したと言われる。これが言語意識の高揚と共に払拭され見事に整えられた姿を呈し始めたのが Valdés の時代であったとすれば、この両者を隔てた40年という時代の流れをも考慮の上、Valdés の非難を受けとめるべきであろう。

とをあなた方にも分かってもらえるでしょう。またこの私がリブリシエの権威を抛りどころと出来ないことを認めてもらうのにも、上に挙げた数の単語で十分だと思うのですよ。

P. 一なるほど、おっしゃることは当然だと思います。

V. 一当然この上もないことで、もしあなたが私の言うところを十分に分かってくれるのなら、私が不遜にけちばかり付けているのではなく、むしろ不備な点を取上げるのを控え目に行っていることに気付かれることでしょうね。それに私があの語彙集の中では、リブリシエに同意し得ない点が別にもうひとつあることを承知しておいてもらいたいです。それは、彼が当然なすべきことであるにもかかわらず、イスパニア語の単語すべてを網羅せず、その意味内容を定義出来るようなラテン語かあるいはギリシア語の単語が見当るようなイスパニア語だけを取り出そうと意図したふしがあることなのです。

P. 一おっしゃったことで十分です。私はすっかり思い違いをしておりました。

V. 一アマディス・デ・ガウラの著者に如何ほどの権威を認めるべきかについては、これから話すことを基にしてあなた方に判断してもらった方がいいのです。いいですか、つまり、文体の点では、私には何んだか訳の分らない、作者一人よがり、興ざめで、きざな書き方をしては失敗ばかりを重ねているのですが、このような表現もその作品が書かれた時代に使われたのなら、何の非難の的となるべきではないと思います。しかし、作者がその文体をその話しが事実あったとしている時代に無理に合致させようとしたのだとも考えられるので、もしこちらだとすれば、それはまったくの的はずれとしか言いようがありませんね。というのも、作者はこの物語りはキリスト受難のわずか後にあったことだと言っていますが、この作者の使っていることばは長年後でなければイスパニアで話されることもなかったわけですからね。まったく同じことが語彙の面についても言えるのです。正書法については、悪いのは印刷屋で、本の作者のせいではないので、ここでは触れずにおきます。

M. 一さあ、さあ、こんなことに時間をつぶすのは止めておきましょう。あなたのお手紙について私どもがお尋ねしようとするのに対し、私たちを納得させられるような抛りどころとなるカスティリア語の書物がないと言われるのなら、他の人たちとは違う流儀でもを書いてみようと思いつかれたその動機をお話しいただいて、せめても私たちを得心させて下さいませんか。そのお話しも、書物の権威が示しうるのとまったく同じ価値を持つことになるかもしれませんし、またあなたがローマに居られた時に、ローマの廷臣の要請を受けて、お友達の間から集めたとおっしゃっている例のカスティリア諺帳をも、私の考えですが、諸々の問題に利用していただければなお結構なことで、こうなればお話はなおさら有益なものになるのは間違いありませんからね。

P. —そうです。仲々うまく言いましたね。その諺の中にはカスティリア語の純粋な姿がはっきりと現われているのですから。

C. —話を進めるまえに、諺 (refranes) とは何かを私は知っておく 必要があるのですが。

V. —格言 (proverbios) あるいは箴言 (adagios) と同じですよ。

C. —あなたはそれの印刷した本をお持ちなんですか。

V. —全部を集めたものではありませんが、子供の時に、説明は不備ではある程度それを集めてあるのを見た記憶はありますね。

C. —ラテン語やギリシア語の諺に似たものですか。

V. —いやそれと大きな共通点はありませんよ。というのも、カスティリア語のものは市井の言い習わしからとり出されたものです。つまり、その大部分が煖炉をかこんで、糸取り棒の糸をつむいでいる老婆たちの間に生れ、育くまれてきたものですが⁽¹⁰⁾、ギリシア語やラテン語の諺は、あなた方も知っているように有識者の間に生れ、高度な学問を取扱う書物の中で磨き上げられているのですから。しかし、カスティリア語の特質を考える上で、諺が最も有用なのは、それが一般庶民の中に生れたという点にあるのです。

P. —私の身分にもとらないことであるなら、私はもうずっと前に、見かけた諺全部を書き出し、出来るだけ間違いのないようにそれに説明を加えて、エラスモがラテン語で著したと言われるのと同様⁽¹¹⁾、カスティリア語での諺の本を書こうと断固決意していただろうということを、ここであなたに申しておきたいですね。こういいますのも、その本が出来ればカスティリア語に多大の貢献が出来るだろうと常々考えてきたからなのです。

V. ジュリアス・シーザーもあなたと同じ仕事をしていましたが、昼に鎗で成しとげたことを、夜には手にペンを持ちかえて書き記すのをその身分にもとるとは考えなかったのですから、仕事は異うからそれは止めだとは言えませんよ。筆は鎗の穂先を落さない⁽¹²⁾ということを知られたことはありませんか。

(註10)この部分、原典では、“los más dellos(=refranes)nacidos y criados entre viejas tras el fuego”となっているが、ここでは Marqués de Santillana (1398—1458) 編、Refranes que dicen las viejas tras el fuego という諺集の標題をもじって言ったのだろう。

(註11)エラスモも Adagia と題する諺集を1500年に著している。

(註12)原典では、“d No avéis oído dezir que las letras no embotan la lança?” となっている。

P. 一お言葉ごもっともで、私もそれは知っています。己のなしたことを書き記したのであって、他人の話しを書き取ったのではなかったとかいう、あのシーザーが手にしたような題材を私にも頂けませんか、そうすれば物を書くのを恥ずかしいなんてこの私が思い込んでいるかどうかおわかりになってもらえるはずです。しかし、これに類するようなことを書くのは軍人のやることではなく、じっと座っている人たちの仕事でありましょうから、それにどうも手を染めかねたのです。

V. 私は軍人ではないし、かといって座って物を読み書きするといった高尚な仕事をしているわけでもないのだから、あなた方がことばについてのくだらぬことごとを取り上げ、私にそれを根掘り葉掘り尋ねることで、私が完膚なきまでにたたかれることになるのはどうも我慢しかねるのです。だから、あなた方とはこのようにしておこうと決めました。つまり、私の手紙であなた方が見つけたことのうち、いいと思われるのがあれば、それを取り出して、あなた方のものにしてもらえばいいし、そうすることに私はとやかく言いませんよ。また、あなた方には面白くないと思えるものは、そのままにしておけばいいのですよ。こういうのも、あなた方の返事から、私が手紙の中で言いたかったことをわかってくれたのがはっきりしているので、私としてはそれで十分なんですから。

M. 一あなたのお手紙の中で私たちが気付いたことというのは、まずは、私たちみながつまなく無条件に是認出来ないという理由で、正しい使い方と言い難い内容のものもあれば、一方では、私たちには成程と思えるものもあり、また理解出来ないものもあって、これがため間違いと即断するのが憚られるといった性質のものもありますので、あなたの書かれたものだけでなく、それに関連しているか、関連のあり得ることごとについて、あますところなく説明いただく必要があるのですよ。お約束されたのですから、たとえ気が進まなくとも、その約束はお守りいただきますよ。

V. 一トロソスの山、あるいはここでの言い方では、バッカーノ森⁽¹³⁾でもそれ程の無茶なこととはしないでしょうが、私の国でも無理が通って道理ひっこむということもありますので、私はあなた方の言に従うことに決めました。さあ、質問を始めて下さい、お答えはしますからね。しかし、いろいろ質問を受けるということですが、あなた方三人がその話の順序を決めておくのがいいのではないのでしょうか。話をややこしくしないためにもね。そうなさい、その間に庭に出て、少し歩いてきますから。

(註13)この部分原典では、“No se haría más en el monte de Toroços”となっている。トロソスの山（現在の Valladolid 県にある）はかつては、追剥の出没する所として有名であったらしく、この山の恐ろしきさまを述べた短かい歌さえも残っている。イタリアでも Bosco di Baccano（バッカーノの森）といえ、16世紀には山賊の横行する場所として有名であったらしい。

M. 一結構ですね。ご教示有難うございます。では、庭にいらして下さい、すぐにお呼びします。

P. 一さて、私たちはバルデスを引き止め、言質を取ったのだから、まずは、ことこまかにあの人を試すまでは、どんなことがあっても彼を逃がしてはなりません。というのも、あの人は何の根拠もなしにものを書くような人ではないと私はにらんでおりますし、今から私たちが彼に話そうとしている問題についても、いろいろこと細かく手控え帳に書き入れて持っているということには賭けてもいいのですから。これまであんなにものを書くのが好きな人にお目にかかったことがないし、私の目に狂いはありません。家にいる時はいつも手から鴛ペンを離さず、あの福音書を書いた聖ヨハネもどきで⁽¹⁴⁾、昼にやったことを夜に、夜夢見たことは昼に書き記すといった程の勉強家だと思うのですよ。

M. 一その通りですね。さて、あなたはカスティリア語に堪能で、あの人は何をたずねるべきかを一番よく知っているだろうから、私たちが混乱をきたさないよう問題の整理をやって下さいね。

P. 一いやいや、該博な知識を持っているあなた方のどちらかにそれはお任せしますよ、私は整理なんていうよりむしろまぜかえす方だということをよく知っているのですね。

M. 一もしあなた方が私に音頭をとらせてくれるというのなら、こんな風にしてみたらどうでしょう。つまり、まず初めに、カスティリア語だけでなく現在イスパニアで話されているその他のことばの起源、即ち発祥について、あの人に知っていることを尋ね、二番目には文法に関することを、三番目はある字母を他のものに続けて書く場合に私たちが気付いたことを、四番目は彼がある特定の単語に一音節をつけたり、またとったりする理由を、五番目には何故他の人びとが使っている多くの単語を使わないのか、その理由を話してもらうこと、六番目は彼が文体の上で、その旨として守っている秘訣を私たちに教えるよう頼んでみることに、七番目はカスティリア語で書かれた書物について彼の意見を質し、最後に、カスティリア語とトスカナ語のいずれがラテン語により則したことばと思うかについて彼の考えを言ってもらったらどうでしょうか。だから、最初は言語の起源、二番目は文法、三番目は正書法、四番目は音節、五番目は語彙、六番目は文体、七番目は文学作品、最後に諸言語の類似性を尋ねることになりますが、このような進め方でいかがですか。

P. 一誰もそれを逸脱せずに、その順序を固く守るという条件さえ付ければ、それが一番い

(註14)この部分、原典では、“*está hecho un San Juan Evangelista*”となっている。ここでは、旧約聖書の一部を執筆したと言われる聖ヨハネを引き合いに出して、文才のある人、勉強家でものを書くことの好きな人の意味をもたせた。

いですね。

C. 一私はいつも覚られないように用意万端怠りなくしておきたい性なんだが、出来れば見えない場所に一人しっかりした記録係をおいて、これからの話しの要点を書き留めさせたらと思うんですよ。こうしておけば、ここでの話しの一部を何らかの問答形式にまとめて出版するようバルデスにはっぱをかけることも出来るかもしれませんね。

M. 一仲々うまく考えたもんだな、そうしましょうよ。ご承知のことだが、両方のことばのわかるうちのアウレリオ君を使って下さいよ、それで彼に何をすべきかを言い付けておいてもらったら、その間に私はバルデスを呼びに行ってきますので。ああ、バルデスがじっと物思いにふけて歩いているのが見えるぞ。ああそうだ、私たちに邪魔が入ると困るから、だれかが来ても、とにかくだれであっても、家の主人に戸口に居てもらって、私たちはいないと言わせるよう手配をしておいて下さいね。そして、やって来た人たちがそう思い込んで帰ってしまうよう、若い人たちを海の方に遊びに行かせて下さい。こうでもしなければ何も出来ませんからね。

C. 一本当にその通りだ、早速そうしておきましょう。

V. 一やあ、やあ、帰ってきましたよ、どこかの大盤振舞に招かれた時の跣足宗の僧侶よりもまだ温和くなってね⁽¹⁵⁾。

M. 一面白い話しになることは間違いありませんよ。さて、時間を無駄にしないためにも、皆さんのお許しを得て、私が話しの口火を切らせていただきますよ。

P. 一私としては、あなたに大切な質問をみなしてもらって、こちら二人がじっくりと拝聴出来るのなら、願ったりかなったりです。

M. 一そのお言葉に甘えて話しの口火を切らせてもらいましょう。まずはじめに、バルデスさん、まずあなたにお話し願いたいのは、今日イスパニアで使われていることば、特にカスティリア語の起源と発祥とがどこにあるかということなのです。このようなお尋ねをするのも、私たちが今からカスティリア語についての話しをしようというのですから、その成立の程を知っておくのが話しの筋として必要だと考えますので。

V. 一実に古い、昔のことを持ち出してきましたね。文法というよりは歴史の問題ですから

(註15)原典では“más obediente que un fraile descalzo quando es combidado para algún vanquete”となっている。跣足宗とは恭順と貧困とをその宗旨とする宗派で、普通その宗派に属する僧侶は素足で修行し、神に仕えたという。この跣足宗の僧侶を引き合いに出して、その従順さを強調し、あわせて食事に招かれた時の食卓につく素早さを皮肉った表現である。

話しはなおさらこみいってしまいますが、みなのご希望とあればそのことについて、これまで私の考えてきたことを、喜んで、すっかりお話ししましょう。あとで私の考えについてみなさんの意見をも聞かせてほしいので、しっかり聴いて下さいよ。さて、あなた方が、その起源について知りたいという現在のカスティリアのことばは、その根幹となるものはローマ人の移植したことば、即ちラテン語ではあっても、ローマ人がイスパニアを領有する前にそこにあったことばの一部をとどめ、併せてローマ人に続いて到来したゴート族のことばの一部をも、また長年に亘って君臨したモーロ人（モロコシ人）のことばの一部をもとどめているので、まず最初に、ローマ人がイスパニアに来る前にそこで使われていた古のことばが何語かを調べてみるのも面白いでしょう。この問題に大きな興味を抱く人たちのほとんどみなが考え、また信じ込んでいるのは、現在ビスカヤの人々の使っていることばがかの古のイスパニアの言語だということで、この意見を次の二つの明々白々な理由によって確証付けています。そのひとつは、ローマ軍が古きイスパニアを征服した時にも、今日ビスカヤと称されているあの地方に進攻出来なかったということに加えて、ローマ人がイスパニアの支配者となって後、その地全土でローマのことばが使われるよう策した時代にも、このローマの言語がかの地には伝播し得なかったということと、今一つは、ビスカヤ語は今日イスパニアで用いられている他のいずれのことばのとも似ても似つかないことをその理由とするのです。こういったことから、あのビスカヤの国は、その独立した状態に併せて、その固有のことばをも保持したのはおおむね確かなことと見做されています。かつては私もこれと同じ意見でしたし、先の二つの理由付けに私も満足出来たので、多分そうなんだろうと考えたのでした。しかし、その後、つらつら考え、また少しばかり念を入れて本を読んだ結果、かつてのイスパニアで使われていたことばは、今のことばがラテン語の流れを引くものであるのと同じく、ギリシア語的なものであったという意見を持つに至ったのです。つまり、今日のカスティリアのことばが、たとえその他のことばと混淆しているにせよ、その大部分、かつまた肝心要の部分はラテン語を継承しているように、当時使われていたことばは、他のことばが混じり合っているにせよ、その大部分、また根幹をなす部分はギリシア語にあったという意味なのです。私は二つのきっかけからこの考えを抱くようになりました。そのひとつは諸家の史書を読み、これで、通商面のみならず軍事面でもイスパニアと最も頻りに交渉を持ったのはギリシア人であったのがわかったのです。あなた方も知っているように、この二つはことばの姿を変え、別のものに置き換えてしまふ程の力を持っていますし、ギリシア人がイスパニアに来て定住したという記録を読んで、なおさら私は確信を深めたのです。ここからも、イスパニアでもギリシア人がそのことばを積極的に維持しただけでなく、それを他の国々に伝え、それを知った国々はあのように豊かで豊潤なことばに魅かれ、ギリシア語を受け入れたのだと考えてしかるべきです。さきの意見を持つに至ったもうひとつのきっかけはカスティリア語の単語の考察、検討にあるといえます。つまり、カスティリア語の単語を見直してみると、ラテン語でもアラビア語でもない単語の多くはギリシア語であることがわかりますが、私はこれはきっと昔あった古のことばから残ったものと思うのです。

し、同じことがいくつかの表現の形式にも言えるのです⁽¹⁶⁾。というのも、あなた方も知っていることですが、外国語でしゃべろうとする人は常にその人固有のことばの単語や表現の形式をいくつかは必ず使うものなのですからね。

M. 一私には初耳ですね。歴史のことではなくて、カスティリア語がそれ程にまでギリシア語に依存しているとおっしゃるお話のことなのでして、あなたがお気を悪くされては困りますが、その持論をどのようにして証明されるかを伺うまでは、お話を信じられませんが…

V. 一こんな場合とにかく信用するのが聞き手の礼儀であるのかもしれませんが、今あなた方にお話ししたことでは、納得出来るところだけをよしとしてもらうだけで結構ですよ。

M. 一ではあなたのお言葉に甘えて申しますが、escandalizar, atesorar, evangelio, apóstolのようにカスティリア語が聖書から取り入れたギリシア語や, ciminterio や martilajo のようにこれと関係のある語, cristal, paroxismo, efímera, gargarismo のような医学用語らしきものなどをあなたの論拠とされるのを認め難いように思えます⁽¹⁷⁾。というのは、私はこういう単語そのものがそれ独特の古き歴史を示していると考えたいのです。したがって、もし私のこの考え方が駄目だとおっしゃるのなら、あなたの持論も無に帰してしまうということにもなりますが。

V. 一あなたの言った単語のうちのいずれかを使って話を進めることも出来ますが、言い

(註16)このギリシア語起源説について、R. Lapesa は次のように述べている。El fallo más grave fue suponer que la lengua de la España prerromana descendía del griego; le movió, sin duda, el afán renacentista de entroncar lo nacional con lo clásico. (pág. 24, Diálogo de la Lengua, Clás. Ebro); なおギリシア語とイスパニア語その関連については、R. Lapesa, Historia de la Lengua Española, pág. 44 y sigs. を参照のこと。

(註17)Marcio が挙げたこれらの単語の語源を調べてみると、次のような結果が得られた。主たる典拠としては、Diccionario de la Lengua Española (Real Academia Española), Breve Diccionario Etimológico de la Lengua Castellana (J. Corominas), Diccionario Etimológico de la Lengua Española (V. García de Diego) で、特にこの三者に大きな差が認められるとき限って、出典を明示した。

escandalizar <lat. scandalizāre <gr. skandalízo

atesorar <lat. a<ad+thesaurus <gr. thēsauros

evangelio <lat. evangelium <gr. evuángelion

apóstol <lat. apostolus <gr. apóstolos

ciminterio <lat. coemeterium <gr. koimētérion

martilajo (=martirologio) <lat. martyr+gr. logos

cristel (=crister) <lat. clyster <gr. clyster

paroxismo <gr. paroxysmós

efímero <gr. ephēmeros

gargarismo <lat. gargarisma <gr. gargarismós

争いをしないようそれはそれとしておき、私の言が正しいことを皆さんに認めてもらえるのに、まったくもって十分の、しかも私の考えるところ、その古き歴史を示している単語を他にいくつかあなた方に言うておきましょう。こういう類の語には、“逃げる”の意味で使う *apeldar*，“病気”の意味での *malatía*，“粉置き場”の意味での *cillero*，“気取り”の意味での *fantasía*，“でたらめ”の意味での *gaçafatón*，加えて，*tío*，*rávano*，*cara*，*carátula* があり，“椅子”の意味での *cadira* があります。また，*trévedes* と *chimenea* もギリシア語から残ったものでしょうし，*brasso* が“沸騰させる”の意味を持つことから考えて，*brasa* や *abrasar* もそうでしょう。その他に *açomar*，*masa*，*moço*，*mesta*，*cañada*，*barrio*，*cisne*，*pinjado*，*artesa*，*tramar*，*truhán*，*mandra*，*celemín*，*glotón*，*tragón*，*tragar* も同じことじゃないかと思います。また，*pan* で始まっていて，ギリシア語から出たものもいくつか，例えば *pantuflos*，*pandero*，*panfarrón* のようにあります⁽¹⁸⁾。

(註18) *apeldar* <lat. **appëllitare* <*appellāre*

malatía <*malato* <lat. *male habitus*

cillero <lat. *cellarius*

fantasía <lat. *phantasia* <gr. *phantasia*

gaçafatón <grecolat. *cacemphaton*

tío <lat. *thius* <gr. *thêios*

rávano (= *rábano*) <lat. *raphānus* <gr. *ráphanos*

cara <lat. *cara* <gr. *kára*

carátula <*cara*

cadira (= *silla*) <lat. *cathēdra*

trévedes (= *trébedes*) <lat. *tripēdes*

chimenea <fr. *cheminée* <lat. *caminus* <gr. *káminos*

brasa : de origen incierto (latino o prerromano)-Corominas

açomar <lat. **assummāre*

masa <lat. *massa*

mozo ; lat. *mūstēus* ; de origen incierto-Corominas

mesta <lat. *mīxta*

cañada <lat. *canna*

barrio <ár. *barri*

cisne <ant. fr. *cisne* <lat. *cycīnus* <gr. *kýknos*

pinjado <**pendicatus*

artesa <gr. *artos*

tramar <esp. *trama* <lat. *trama*

truhán <fr. *truand* <célt. *trug* (= *vagabundo*)

mandra <lat. *mandra* <gr. *mándra*

celemín <ár. *θemēni*

glotón <lat. *glüttōnis*

tragar : de origen incierto, probablemente del latín “*dracōnis*” -Corominas

pantuflos <fr. *pantoufle*-R. A. E. ; de origen incierto-Corominas

pandero <lat. *pandorium* <gr. *pandúrion*

panfarrón = *fanfarrón* <ár. *farfâr*

これ以外にも沢山あるでしょうが、この点にはこれまで注意を払って見たことはないのです。また、勿論ラテン語から出たものでも、そのラテン語と同じ意味を持つギリシア語の意味内容に合わせて造り変えられたのが間違いないと思える単語もあるのですよ。そのひとつが *dexemplar* という語で、これはイスパニアのある地域では今は *disfamar* の意味で使っているものです。この単語は、イスパニア人がかつては *exemplum* の意味ではギリシア人と同じように *paradigma* と言っていたのが、さてラテン語を使う段になって、*exemplum* を自己流に訛った結果生じた形なのです⁽¹⁹⁾。同じように、フランス人も彼ら本来のことばを話すときには *si* の意味で *uida* と言うのですが、ラテン語を使うようなときには *ita* と言うだけでは満足せず、彼らのことばにある *da* を付け加えて *itada* と言っているのですからね。これで語彙に関してはもうみなさんには十分だろうと思います。表現の形式については、次のことに気をつけてもらったら、いろいろなことがわかるはずですよ。

M. ーさあ、さあ、お話し下さいませんか。

V. ー私の読んだギリシア人作家のうちルキヤノスが普通の話し方に一番近い人なので、これから例を出しましょう。

M. ーデモステネスの方がいいのですが。

V. ーイソクラテスから例を出せるのなら私としても 実に面白いのですが、しかし私の手許にあるもので今はご勘弁下さい。カスティリア語で“いい生活をしている”と言う時に、“*tiene buena pasada*”⁽²⁰⁾ という表現をとります。これと同じことを言い表わそうとして、ルキヤノスは“*ce diarci ton poron*”と言っています。またカスティリア語で、“*nuestra hacienda*”（我々の財産）とか“*su hacienda*”（彼の財産）との意味で、“*lo nuestro*”，あるいは“*lo suyo*”といって、例えば“*Quien da lo suyo antes de su muerte, merece que le den con un maço en la frente*”⁽²¹⁾のような場合ですが、ここでは“彼のもの”の意味で“*lo suyo*”を使っています。さ

(註19) *paradigma* <lat. *paradigma* <gr. *parádeigma*; (de *paradeíknymi* ‘mostrar, manifestar’) という語源を求め得るが、Corominas はギリシア語に直接その語源を予想している。他方、*dexemplar* (mod. *dejemplar*) は *de* (排除の接頭辞) + *ejemplar* (<lat. *exemplum*) との形式である。Valdés は *paradigma* の語源となる動詞と *ejemplar* の動詞としての語彙的価値とを関連付けようとしたのであろうが、*dexemplar* が *exemplum* と関連させられることからしても、Valdés の考えは認めがたい。

(註20) *tener buena pasada* は現代語では、この意味ではあまり用いられないらしい。現代語では *tener para vivir* (o *pasar*) という。

(註21) *Quien da lo suyo antes de su muerte (o su hacienda antes de la muerte) merece que le den con un maço en la frente*: 「自分の死ぬ前に財産を与える者は、大槌でそのひたいにひとつ喰らわせてもらうのがいい」とは、生存中に地位、財産などを他人に譲渡することは、それがどんな周到きものも行なわれても、必ず後悔の種になることを教えたもの。

て、ルキヤノスもまったく同じ意味で、“ta imetera”と書いています。また、私たちがカステリア語で子供や若い者を叱って、“おこったらこわいよ”と言うときに、“Pues si yo te empiezo”とありますが⁽²²⁾、同じ言い方をして、ルキヤノスは“mu catirxato”と言っていますが、これは“me empecó”の意味を持つのです。もしあなた方が私の論旨に不満ならば、この私の意見を正しいものと確認してもらう手だてとして、今言ったことの他に冠詞が一致することやそれ以外のことごとく証明の論拠にすることさえ出来るのですよ。

M. 一とんでもありません、あなたのお話しで十分で、あなたのご意見は明々白々、しごくもっともと思えますので、私としては、今日からはあなたのお考えを自分のものとする積りですし、この二人も私に倣うと思います。さて、あなたの言われるように、ローマ人がイスパニアを領有し、そこに彼らのことばを持ち込む前にイスパニアで話されていた言語は、今日のもがラテン語系のものであるのと同じく、ギリシア語の流れをくむものであったとして、どうぞ、お話しをお進め下さい。

V. 一あなたはこの点についてしごく言い争いをしないですませられるきっかけを出してくれましたね。というのも、強引な奴と思われるよりは馬鹿になっているのがいいのだと自分に言いかせて、私は自分の意見に固執せずに負けておこうという諦めの心境にもなっていたからです。でもいいですか、もし、イスパニアではビスカヤ語がギリシア語より古いことばだと言う人があれば、私としてはそれと反対のことを言い張って議論をする積りはまったくありませんし、それどころか、私の考えを認めてもらえるという条件さえあれば、その人の言うことも成程もっともだとして受け入れるでしょうね。

P. 一私はあなたが結論として出されたことを素直に認める訳にはまいりません。というのは、もしイスパニアの古のことばがギリシア語の流れをくむものとしたら、ガヨ・ルシオや三人のシピオン将軍や、クラウディオ・ネロンやセンプロニオ・グラコ⁽²³⁾は通訳を入れてトウルデ

(註22) Si yo te empiezo... : 古い表現形式で、本文からも明らかなように、おしおきをする時に使うきまり文句である。近代語でも、“Ohaval, deja de molertarme, que si yo empiezo...”という表現形式がある。また、Valdés のこの考え方、即ち、ギリシア語の特定の文構造をイスパニア語がとり入れたという考え方も認められていない。かつて中世イスパニア語で用いられた形式の、《mucho es huebos, ca çerca viene el plazdo; Cid-212》はラテン語の opus est mihi という表現形式を原形とすると考えられるが、このような一致はギリシア語とイスパニア語とに直接的に予想するのは困難であろう。

(註23) Gayo Lucio : ローマの法政官の一人; tres Cipiones とは第二ポエニ戦争でのカルタゴを征服した Cneo Escipión と Publio Escipión の二兄弟と、第三ポエニ戦争でカルタゴを陥し、Numancia を征服した Escipión Emiliano のこと; Clandio Nerón : 悪名高きローマ皇帝; Sempronio Graco : ローマの護民官として有名であった二兄弟の一人を指すのであろう。

タノ族や、イベロ族という名でも呼ばれるケルト・イベロ族、カンタブロ族などと話しをする必要もなかったことになりまして、フェニキアの商人たちも、カルタゴ人やローマ人の攻撃を受ける前にイスパニアにいた先住民族との商取引の場では、通訳を必要としなかったということにもなるからです。

V. —それは、先に私が言ったように、ラテン語がイスパニアからギリシア語を駆逐したということだけで十分なのです。さて、このラテン語は他のことばと混淆し、ある程度はくずれながらもゴート族の到来まではイスパニアで使われていたのです。このゴート族もラテン語を駆逐するには至らなかったが、彼らのことばでなお一層ラテン語をくずすことになったので、イスパニアでのラテン語は私の考えでのギリシア語とゴート語からの二つの要素の混入を受けていることになります。私の思うところ、このようにくずれたラテン語はイスパニア全土に及び、大体719年頃アフリカから渡って来た何人かのモーロの王の手にイスパニアが征服されてしまって、ゴート族の王ドン・ロドリゴがなす術もなくイスパニアを失ってしまうまで用いられていました。さて、モーロ人の到来によって、イスパニアではアラビア語が使われ始めたのですが、アストゥリアス、ビスカヤとレプスカ^(註24)の地方とアラゴンとカタルーニャ地方の難攻不落の諸地域だけは例外で、こういった地域はモーロ人の力に屈服せず、この地のキリスト教徒の多くが土地の陰しさをその守りとし、防備として身の安全を固くし、併せて彼らの信仰、独自の生活、ことばを継持し、安全に暮らしていたのですが、ついに他の地に比べより多くの人々が難を避けたアストゥリアスでイスパニア人の王としてドンペラヨ皇子^(註25)が擁立されることとなります。この皇子はその家来を率いモーロ人に対する戦を始め、神の加護を受けモーロ人から失地を奪回してゆくのです。このアストゥリアス王国ではペラヨ王の後継者が次々と現われ、モーロ人への戦いをも継承し、一都市、また次の都市を、一王国、また新たな王国を、次々にモーロ人の手から奪い取っていったのです。この征服の事業は、あなた方も知っているように、1492年まで続き、この年にあの栄光の思い出に包まれたカトリック両王がグラナダ王国を陥すことで、イスパニア全土を完全にモーロ人の圧政から解放したのでした。このモーロ人の支配の下では、イスパニア人は自分たちの言語に多くのアラビア語の要素が混じり合わない程頑なに彼らのことばの純粋さを保持することが出来なかったのです。というのは、イスパニア人たちは諸王国、都市、町、村を次々と手中にしていたのですが、いまだそこには多くのモーロ人が住民として居残り、相変らず彼らのことばを使っていたのですし、加えて、このモーロ人はほんの何年か前に皇帝陛下がキリスト教徒に改宗するか、さもなければイスパニアを退去するかのいずれかをとるべしとの勅命を下されるまではイスパニアに在住し、私たちイスパニア人に混じってアラビア語を使ううちに、その単語の多くが私たちのことばにもうつってしまったからなのです。このようにぎっとながら

(註24)Lepuzca, Guipúzcoa の古称。

(註25)don Pelayo. ビシ・ゴート族の貴族で、718年イスパニア人の王に推され、再征服の始祖となった。

歴史に触れましたが、あなた方のお尋ねに満足な答えをするにはこうするのがいいと思ったからなのです。さて、ローマ人のことばを知るまえのイスパニアで話されていた言語から、今日のカスティリア語が多少の語彙と表現の方法とをとり入れた事情をあなた方は知ったのですから、今度はアラビア語からどのようにして多数の単語を取り入れたかを認識してもらう必要があります。まず知っておくべきことは、私たちがアラビア語の単語で表わす多くの事物にはラテン語の単語も当てられますが、慣習の点からラテン語のものよりもアラビア語の方をよしとして私たちが使っていることもあり、この結果、tapete よりも alhombra が、piedra sufre よりも alcrevite が、olio よりも azeite の方がそれぞれいい単語ということになっています^(註26)。とくに、もし私が大きな間違いをしていなければ、我々がモロ人から取り入れた諸々の事物についてだけは、それを意味する単語としてはそれに併せてモロ人がイスパニアに持ち込んだアラビア語以外に適当なことばはないと思ってもらっていいでしょう。もしもっと詳しいことをというのであれば、モロ人が冠詞として使い、そのほとんどの名詞の頭に置いている語の al を我々はいくつかのラテン語の単語に併せて一語としているので^(註27)、これが私たちイスパニア人がそういう単語を本来のカスティリア語として認識出来ない理由となっていることをも言っておきましょう。しかし、こういった複雑な事情やことばの混じり合いということはあっても、やはりラテン語がカスティリア語の肝心要の土台となっているのは勿論で、この点、もしあなた方の問いに私が答え、カスティリア語の源泉はラテン語なりと言っていたとしたら、これまで言った諸々のことは余計なこととしてお話しするのを控えておくことも出来たのですよ。でも、その他の面では出来るだけ簡単に済ますことをお許しただけのようにと願うがあまり、この点では手を抜かず詳しく話したことをわかってほしいのです。

P. ーあなたがどんなお方かよくわかっておりますので、たとえ私どもが簡単にとお願いしても、あなたは労を惜しまれないと思いますよ、特にこの話題ではね、いくら大盤振舞をされても元の減るわけでもないのですから。

M. ー仲々うまく返事をしてくれましたね。さて、バルデスさま、あなたもまた私どもの質問に十分に満足のいくお答えを下さいました。つまり、イスパニアの最古のことばについてのお考え、ラテン語の転訛についてのあなたのご意見は論破出来ない立派なものだと思えるのです。しかし、カスティリア語の土台がラテン語であるとするにしても、カタルーニャ語、バレンシア語、ポル

(註26)alhombra (=alfombra) <ar. al-jumra; alcrebite <ár. al-kibrit; azeite (=aceite) <ár. az-zait

(註27)この種類の語彙には、almadreña, almendra, almeja などがあり、また albérrchigo, albaricoque, alpiste などはアラビア語を経由してイスパニア語に取入れられたラテン語源の語とされている。

ポルトガル語、ビスカヤ語という、カスティリア語以外の今日ある四種類のことばがイスパニアで使われているのは何処にその因と発祥とがあるかを私どもにまだお聞かせ下さっていませんが。

V. 一私が確実に知っていることをというのでなしに、推論で了解するに至ったこと、周到に考えて、私の結論したことをお話ししますので、この話に対してはあなた方なりにお好きなだけ信用して下さいというので十分ですよ。この前提のもとにまず、二つの事柄が主として一地方での言語相互間の相違をひき起す原因となることを言っておかねばなりません。そのひとつは、問題の地方が特定の一君主、王、あるいは領主の統治下でない場合には、存在する領主の数と同じだけの差異が言語の面にも生じてくることです。もうひとつは、隣近接の諸地域は何らかの形で常に接触しているために、一国の一地域がその隣接地域から何らかのものを徐々に摂取するのですが、これが時代と共に変化し、他の隣接の諸地域からは異なったものになってしまうのです。これはことばそのものだけでなく、話し方や習慣にも起ることです。ご承知のように、イスパニアはこれまで多くの領主の下に分割されていて、一カスティリアでさえ比較的近年まで分割統治されていたという事実をしばしおくとすれば 一例えば、カタルーニャ地方は侯 (conde) と呼ばれた領主の領地であったし、アラゴンも王 (rey) と称する一領主の領土でしたが、この二領地が婚姻を通じて合統されたのでした。この地方は、その後武力でモーロ人の領地であったバレンシア王国を征服し、歴史の流れにのり、この双方がカスティリアに併合されることとなったのです。グラナダ王国もまたナバラ王国もそれぞれ独自の領土を持っていたのですが、今では、両国とも不本意ながらもカスティリア王家の支配の下にあります。あなた方も知っているように、ポルトガルはそれ独自の王をいただき、現在ではカスティリア王家から分離しております。このように領国が多く存在したという事実が、私には何らかの意味でイスパニアにある言語相互間の差を招来したものと結論させるのです。とはいっても、イスパニアにある諸言語のうちどれをとっても、その他どの地域のことばよりもカスティリア語に一致する割合が大きいということは勿論言うまでもなく、これは、イスパニアにある諸言語が、例えばフランスやイタリアから影響を受けたカタルーニャ地方、カタルーニャ地方から多くを摂取したバレンシア地方のように、それぞれその近隣地域からの影響を受けてはいても、すでにお話ししたように、カスティリア語の土台となるラテン語をその中核とするものであることを思い起せば解決がつくことです。この点については私の知っていること、またお話し出来ることをみな言ってしまったのでこれ以上お話しすることはありません。ビスカヤ語については、出来れば多少なりともお話ししたいのですが、このことばを私は知らないし、また分かりもしませんので、ただ次のことだけを言うにとどめておきましょう。私がビスカヤ語の分かる人たちから聞いたところでは、沢山のラテン語の単語がこのことばの中に入った模様ですが、その単語に添加された要素によっても、またその単語を発音するその発音の仕方によっても、そのラテン語系の単語の実体が分らなくなっています。

このビスカヤ語は スペインにある 他のすべてのことばとは まったく無縁で、それを母国語とする人たちも、このことばを使うと 他の地域の人々には ほとんどその話しがわかってもらえないし、また他地域の人も自分たちのことばではビスカヤ人にその意思を通じさせることはむづかしいのです⁽²⁸⁾。カタラン語は昔のリムサン語⁽²⁹⁾だと言われています。このリムサン語とは現在のオック語で、その語彙として完全な形のラテン語の単語を摂取しなかったという特殊性はあっても、その多くをラテン語におおぎ、また本来のフランス語、カスティリア語やイタリア語からも語彙の一部を取り入れ、言語としての形を整えたのでした。バレンシア語もまたとてもよくカタルーニャ語に類似していますので、どちらかひとつが分る人は、もう一方をも大体こなせるようです。両者の差は、主なところ発音にあって、その発音はカスティリア語に近いので、カスティリア人にはカタルーニャ語よりも聞き易いということになります。ポルトガル語はスペインにある他のどの言語よりもカスティリア語に近く、私の思うところ、この二つのことばの間にある主な差は発音と正書法でしょう。

M. 一おおせの通りだとしても、これまでほとんどずっと その独立を継持してきた王国のアラゴンやナバラでは何故カスティリア語が使われているのですか。

V. 一その理由は次のようになると思いますよ。ドン・ペラヨ王の旗の下、アストゥリアスに難を避けたキリスト教徒がカスティリアをその手中に収める途時にあっても、彼らのことばをたゆまず保持し続けたのと同じように、ピレネー山脈の要塞の地にドン・ガルシ・ヒメネス王⁽³⁰⁾の庇護のもと立てこもったキリスト教徒たちも、アラゴンやナバラを征服しつつも、変ることなく自分たちのことばを持ち続けたのです。加えて、このアラゴンとナバラとが常にカスティリアと頻繁に交渉を持ったということもあなたの言うその現象を生む因のひとつに数え上げられると思います。アンダルシヤやムルシヤ王国ではこの二地方が沿岸地域であるがため、他の諸地域に起ったようなことがなかったのですが、この理由は私の考えるところ、カスティリア人たちが、その地にカスティリア語を容易に受入れられる程数多く住むようになった、そういう時代にこの二地方を征服したことと、この二地方がその生活を維持するための交易上の目的で、他の国々と接触する必要がなかったことになろうかと思います。

(註28)ここでいうビスカヤ語とはバスコ語のことで、ドン・キホーテ、前篇八章にも「ひどいカスティリーヤ語というよりも、もっとひどいビスカヤ訛りで、…」といったくだりがある。

(註29)リムサン (lemonsin) 語：中世の吟遊詩人と共にその名をはせた Limoges 地方に用いられたプロバンス語の一方言形式の呼称で、かつてはその名称でプロバンス語圏の諸方言、これと系統を同じくするカタルーニャ語、バレンシア語、マリョルカ語をも総括的に表わした。

(註30)Garci Ximénez：8—9世紀のナバラ王と考えられるが、その実在を証拠付けるような資料はいまだ確認されていないと言われる。

M. —あなたのお話には私は満足この上もございませんし、今の話題については おっしゃったことで私どもには十分ですので、イスパニアにある他の四つのことばはそれとして、カスティリア語にすることだけをお話し下さるようお願いしたいのです。

V. —もしあなたがある地域とその他の地域との間のカスティリア語に見られる差異を話題とするのなら、話に限りがなくなるでしょうね。というのも、カスティリア語はカスティリア地方全域だけでなく、アラゴン王国、アンダルシア地方全域をも含むムルシア王国、ガリシア、アストゥリアスやナバラでも使われていて、一般民衆の間にさえも及び、あまつさえ有識者の間ではイスパニア全土にひろく使われていますし、そのうえ、各地方がそれぞれ独特の語彙、表現の方法を持つことも予想されるからです。したがって、アラゴンのことばはそれ独自の語彙、表現の方法を持ち、アンダルシアのことばはまたそれとは変った別の形式を、ナバラはまた別にそれ独特のものを持つかわら、旧カスティリアと呼ばれるカンポスの地⁽³¹⁾にもトレド王国にもそれぞれ固有のものがありますので、話し出せばきりがなくなってしまいます。

P. —私どもにはあなたを抜き差しならぬ所に引き込む積りなどまったくないのです。ただトレド王国で、つまりイスパニアの首都で育たれたあなたに、その地で使われていることばについてお尋ねしようというだけで、もし話しが他の地方のことに及ぶことがあっても、そこはご辛抱いただきたいのです。

V. —問題を限って、それを広げすぎないようにと言うのなら、喜んでご意向に従いますよ。

M. —カスティリア語はヘブライ語から何らかの語彙を取り入れたとお考えですか。

V. —たった一語しか思いつきませんが、これも宗教から入ってきたのだと考えます。即ち、abad という語で、ここから abadessa, abadía, abadengo が生れています。

C. —その abadengo という語を私は聞き初めて、その意味を明らかにしてから、話をお進め下さい。

V. —Real というカスティリア語から“王に属するもの”という意味で realengo という語を造るように、僧侶たちがあのいつもの謙譲さで自分たちを王になぞらえ、“僧院長 (abad), あるいは 僧院長の職権 (abadía) に属するもの”を、abad を基として abadengo と言わせたの

(註31)Tierras de Campos : 現在の Palencia 県を中心とする地域をいい、旧レオン王国の一部であり、9世紀末にはキリスト教徒の手で再征服され、最も古いカスティリーヤ方言 (habla de Cantabria) を留めた地域と考えられる。

です⁽³²⁾。

P. ーあなたはそういうお坊さんたちが愚かなことをしたとお考えなのですか。

V. ー私はお坊さんといがみ合う気持なんてありませんよ。Costal, あるいは talega の意味で使う saco もヘブライ語で、このヘブライ語のあとから現われたほとんどすべての言語がそうであるように、カスティリア語もこの単語をヘブライ語から取ったのです。

M. ーイタリア語からきたと思えるような単語もいくつかはあるのでしょうか。

V. ーJornal, jornalero と jornada⁽³³⁾ もイタリア語の giorno をその源とすると思います。ただカタルーニア地方にその発祥を求めるてもいいでしょう。

P. ーおっしゃる通りですね。私もそう考えますよ。これまで気に留めないことでしたが…

V. ーそれに加えて、他のことばにはまったくその源泉を持たずに、時の経過と共にカスティリアに発生したまったく純粹のカスティリア語といえる単語もまた他にいくつかあるのではないかと考えてもいるのですが……

M. ー言語の起源については、私たちにお話し下さったことで十分にわかりました。今度は文法に関する点で、カスティリア語がその姿を飾り、その身を整えるための語彙を取り入れた他の諸言語とどのような似かよいを持つかをお聞かせいただきたいのですが。

〔続く〕

1973年 8 月

(註32)abad <lat. abbātis <gr. abbas <siriaco. abba -R. A. E./ arameo : abba -Corominas; saco <lat. saccus <gr. sákko (del fenicio) -Corominas

(註33)jornada : tomado de otra lengua romance, probablemente la lengua de Oc... -Corominas